

友の会だより

編集 みさと協立友の会

048-959-1811 No.93

ちよつと
いい話
20

冬の故郷

母ちゃん、泣くな！

寒い冬の朝。新潟の田舎のことを思い出す。もう七〇数年前、六、七歳のころの話になる。

木片の音が聞こえる。夕飯のあとの夜なべ仕事だった。囲炉裏にたき木が燃えている。

など忘れることができない。いつとき幸せになれる。そう思ったに違いない。

底冷えのする冬の朝。外はまだ暗い。そこだけがポツト明るく、温かい。台所のかまどに火が燃えている。

現金収入の少ない農家の、いくらにもならない小遣い稼ぎを毎晩遅くまでやっていた。少年はそばのこたつで顔だけ出し、猫を抱いて丸まっているとき

家族の前では涙など見せたことのない母が、布団の中で声を押し殺して泣いていたこともあった。両手で顔を覆い、背をふるわせていた。初めてみる母の泣く姿。驚き、不安。一体何があったのか。どんなことがあったのか。少年の小さな胸はつぶれそうだった。

ときどき薪や雑木の枝をくべている。火吹き竹を口に当てる。パチパチとはぜる音が聞こえる。やがて、ほかほかとご飯の炊きあがるにおいがしてくる。

かまどの前にしゃがんだ母がいる。

「母ちゃん、泣くな」

そんな母を寝ぼけまなこで見ている少年の私がこっちにいます。

「寝るほど楽はなかりけり、寝るほど楽はなかりけり」

母はいつも呪文のようにつぶやくと、倒れ込むように薄い布団に入った。

農作業の疲れ、さまざまな気苦労。毎日くたくただったのだから。夫を病気で失い、一人でなにかも背負わねばならなかった。寝てしまえば浮世のこと

「母ちゃん、泣くな」

母に何もしてやれない自分が情けなくて哀しかった。

一日の始まり、夫（私の父）を亡くした母はどんな思いでかまどの火を見つめていたのだろう。

「母ちゃん、泣くな」

母に何もしてやれない自分が情けなくて哀しかった。

家の者が寝静まった夜。カタッ、コトッ、カタ、コト。囲炉裏端で母がひとり炭俵を編んでいる。その重しの

「母ちゃん、泣くな」

母に何もしてやれない自分が情けなくて哀しかった。



（玄間太郎）

新年のご挨拶

明けましておめでとうございませう。昨年は4年ぶりの対面での友の会総会や地域の方々と一緒に集えた「みさと協立病院 健康まつり」の実現など新型コロナウイルスやインフルエンザの流行と向き合いながらも一歩前進した年でした。今年度もさらに地域での活動を重視し会員の皆様と力を合わせ、学習会やフレイル予防、脳活に良いとされる「おしゃべり会」なども開催したいと思っております。世界中の争いが一刻も早く終結し平和とくらしを守り安心して住みつけられる街づくり実現のため行動を進めます。どうぞよろしくお祈り致します。

皆様の健康を祈念し新年のあいさつと致します。

友の会会長

藤元 美彌子



会費納入にご協力ください（ゆうちょ銀行）
口座番号 00510-4 記号番号 44659
みさと協立病院友の会 中川 一秀

第百五十二回 友の会【川柳の会】

題 「味噌」

味噌造り親族集い豆を踏む

信子

たきたての釜のおこげで味噌にぎり

みさ子

味噌をとく兄の姿に胸つまり

智子

減税の財源言えずミソ付ける

たけどん

みそ汁のにおいでおめざしてみたい

良子

厚切りの大根に合う柚子とみそ

みねこ

AIの脳は半導体がミソ

あきらら

サークルのお申し込み、お問い合わせは友の会事務局 048-959-1811 総務課まで

笑いの玉手箱

川柳の会

毎月第4木曜日

午後1時30分～

3時30分

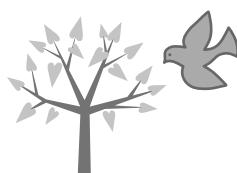
場所：いこいの家717

課題作品 3句
自由作品 3句
を持ち寄って、内容を吟味します。
投稿だけでも歓迎です。

ボランティア活動者の交流

ボランティア班

3ヶ月に1度程度の割合で、ボランティア活動者の交流会を行い、活動の交流や学習を行ないたいと思います。



ちよつと出かけてみませんか？

小さな旅の会

3ヶ月に1回くらい出掛けます。

費用は行き先で決まります。

